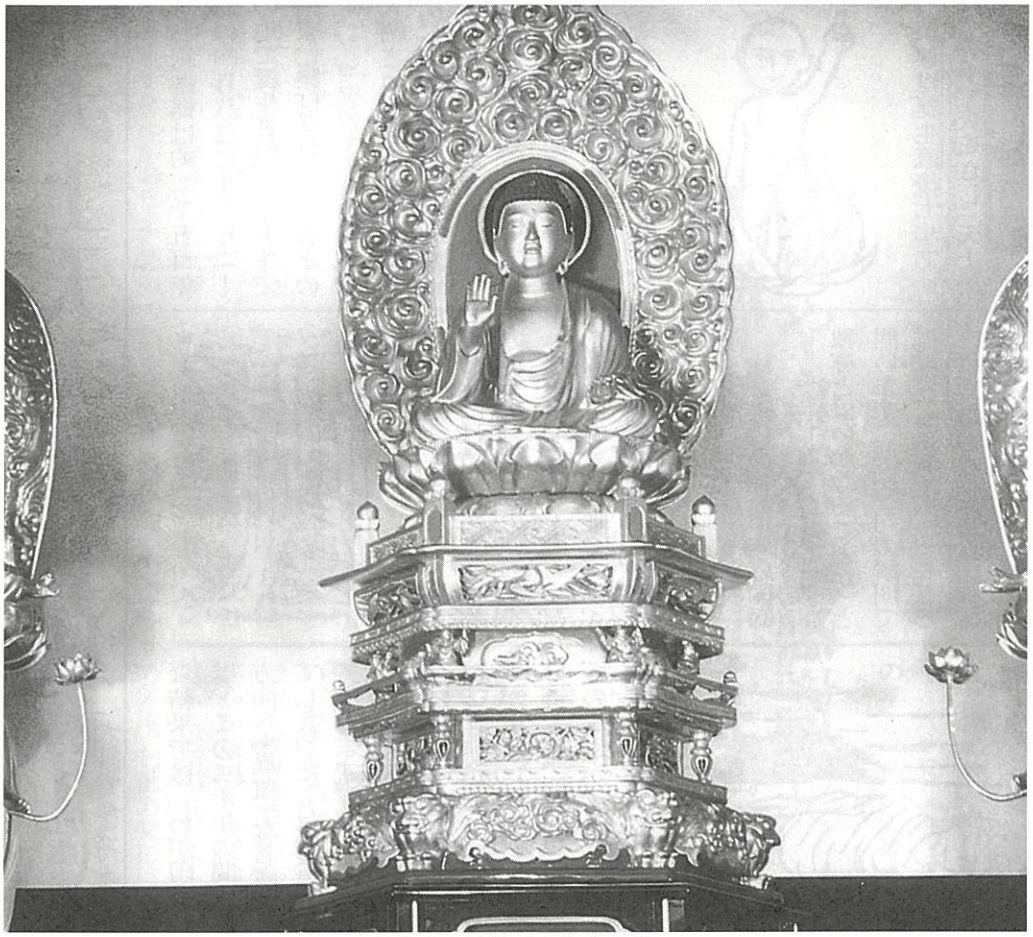
蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811
FAX.(0258) 32-2870
◆スタッフ◆
安藤一夫 小林国二 小林善秋
高橋潔 佐藤正樹 近藤マリ子



安善寺本尊様「釈迦牟尼仏」

佛像の願い

翠巌龍弘

写真は、安善寺の本尊様『釈迦牟尼仏』です。釈迦牟尼仏とは、釈迦族出身の聖者、すなわち、さとれる者、真理にめざめたる者「覚者＝仏陀（Buddha）如来」のことです。

『雑阿含経』には「自覚覚他覚行円満」とあり、自ら真理をさとり、他をさとらせ、さとりのはたらきがきわまり満ちた、究極の覚者ということです。また、同経には「阿耨多羅三藐三菩提」とも説いています。

梵語で阿耨多羅は無上の、三藐は正しい（完全な）、三菩提はさとりという意です。無上正徧知・無上正徧道・無上正等正覚などといわれ、この上なくすぐれた仏、という意になります。

私たちは、親しみをこめて「仏さま」とお呼びしていますか、仏さまとは仏、つまり仏陀のことです。仏と呼びますのは、中央アジアの言葉でフト（Futo）つまり覚者を「浮屠」と訳すことから「浮屠家」となったのだろうといわれています。（他の説もあります）

写真の本尊様の手に注目していただきますと、右手の方は肘を曲げて指をひらいて掌を外に向けておられます。左手は膝の上におかれて、指をひらいて掌を上に向けておられます。

仏像においては、このような尊像が示す手のかたちは重要な意味をもっております。この手のかたちが、仏像の本願（仏様の願い、はたらき）をあらわしており、これを印相といいます。

釈迦如来の右手の印を「施無畏印」といい、左手の印を「与願印」（与願印・施与印）といいます。施無畏印は、人々の不安を取り除くことを意味しており、与願印は、人々の願いをかなえることを意味しています。

他にも印があります。釈迦が降魔成道（悪魔を降伏させ、成道された）の時に用いた「触地印」（降魔印・破魔印）、はじめて説法をして法輪を転じた「転法輪印」（説法印）、瞑想に入る思意の相、三昧の境地に入る「禅定印」（法界定印）があり、釈迦の五印といいます。

安善寺の本尊様『釈迦牟尼仏』は、悩める人々の不安を取り除き、願いをかなえようという、仏様の慈悲があらわれたお姿です。

この施無畏、与願の印は大乗仏教の精神があらわされております。自己のみの救済、つまり「自利」よりも、広く悩める人々を救済する「利他」の菩薩行です。

私たちも自分の幸福だけを願うのでなく、他への思いやり、利他行・慈悲心をもって人生を歩んでいきたいものです。

合掌

天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）

近藤龍弘

お釈迦様は約二千五百年前の四月八日にルンビニーの地で誕生され、二十九才で出家、修行され、三十五才の時、ブッタガヤの菩提樹下で大悟され仏陀となられました。鹿野苑に於いて初転法輪をめぐらし、四十五年間にわたり教化の旅をつづけられ、クシナガラの地で、二月十五日に八十才で涅槃に入られたと伝えられております。

釈尊は誕生直後七歩あゆみ、右手で天をさし「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」と宣言されたと伝えられていますが、もちろん生れたばかりの赤ちゃんが歩いたり話したり出来るわけはありません。後の人が、釈尊の誕生になぞられて仏の大事な教えを示されたものです。この大宇宙の中で釈尊をはじめ、存在する万物の総ては、ほとけのいのちをいただいて尊厳であることを教えています。唯一人尊くない人はいません。人間だけでなく宇宙の動植物総て、天上天下唯我独尊です。

鎌倉時代の禅僧・大応国師に、修行僧が「天上天下唯我独尊とはいかなることか」と問います。僧は字句の説明ではなく、そのことばのこころを求めたわけです。国師は「衆（ひとびと）のために力をつくすことだ」と答えられたそうです。

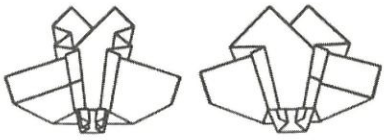
最近の新聞に、東洋大学の中里教授の「思いやり意識」が載っておりました。調査した七カ国の、中・高生の中で日本の結果は最低でした。

その他小学生も含めた調査結果では「わが国の若者は、この二十年の間に悪い方向へ『異質』な若者になってしまった」と教授は言われております。

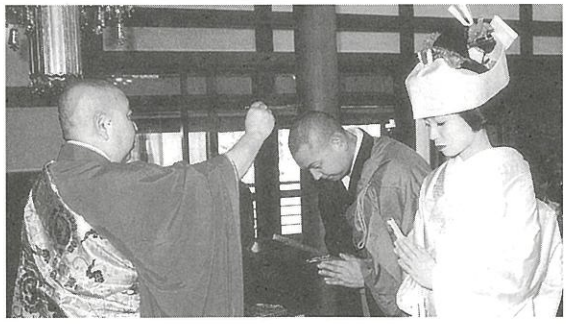
近年の凶悪な少年犯罪の増加や、荒れる学校の状況には、この思いやり意識の希薄化が大いに関係していると分析され、親の思いやり意識の低さが子供に影響を与えていると警鐘を鳴らされております。

今こそ釈尊の教えの原点に戻り、一人ひとりが「天上天下唯我独尊」を心に刻み、総ていのちの尊さ、思いやりを観じ、誰もが困っている人々に自然と手を差しのべられる社会になって欲しいものです。

すばらしい 佛前結婚式



四月四日、隣寺の昌福寺様ご住職の佛式結婚式が、昌福寺本堂で執り行われました。不肖、式師兼仲人を勤めさせて頂きましたが、本尊様への献茶、献灯ではじまり、誓いの言葉、式師のお諭し、親族固めの盃事には、新郎の甥、姪がそれぞれ雄蝶雌蝶の大役を果たし、可愛らしさで式に花を添えてくれました。



最後に参列者全員が見守る中、新郎、新婦が緊張の面持ちで婚姻届に捺印、無事に式が終えたことを全員で般若心経を唱え、本尊様並びに、ご先祖様に報告。時折エレクトーンの演奏の流れる中、約一時間、厳かな雰囲気の内に無事終了致しました。

多くの方々に佛式結婚式の良さを理解して頂き、ご先祖様の前で誓いを改たにしていたきたいと願う次第です。

（近藤龍弘）

皆さまの楽しい話しや身近なお話し、ご質問、ご相談、ご意見を紙面にと考えています。皆さまのそんなお話しをぜひ。

手紙　九四〇―〇〇五二　長岡市神田町一―四―一〇　安善寺
FAX（〇二五八）三二―二八七〇

7月12日（日）は 参議院選挙の日

あなたの大切な一票です。
棄権せず必ず投票しましょう。

先祖や自然に感謝し、心静かに人生を省みるお盆

佐藤正樹

お盆は言うまでもなく国民的行事です。お正月と共に、一年を二分する季節の節目に営まれている大切な行事です。

お盆の始まりは、お釈迦様がお説きになった「盂蘭盆経」からきていると言われています。

さて、その話とは、お釈迦様の弟子で目連尊者という、六神通という超能力にたけたお弟子さんがおりました。目連様はその力を使って、これまで自分を育ててくださった恩に報い、仏の道に母を導きたいと思い、すぐれた智慧の眼で、亡き母を捜しました。そして、母が餓鬼道という地獄に堕ちているのを見つけたのでした。そこには、食べ物もなく、骨と皮ばかりに痩せ衰えた母の姿がありました。

嘆き悲しんだ目連様はすぐ御飯を鉢に盛りつけて母にたむけました。母は喜んで食べようとしましたが、御飯はたちまち火炎となって食べることができません。目連様は大声で嘆き悲しみ、お釈迦様に助けを求めました。

お釈迦様は、静かに説かれました。「あなたの母は、犯した罪の根が成長して深く張っている。たとえ、あなたの孝心の誠が天地を動かしても、これは、あなた一人の力ではどうする事もできない」。お釈迦様は告げて言われた。「多くの僧が修行からあける自恣の日、七月十五日に沢山の御馳走を全ての僧にお供えして、生みの父母、七世の父母のために苦を祓い、楽を与えてくださるよう回向を頼みなさい。大勢の僧が心から唱える回向の功徳は広大無限であるから、生みの父母、七世の父母ばかりでなく、六親眷属といった家族親類にいたるまで、全て三途の苦しみ（地獄、餓鬼、畜生道から救われるであろう」。

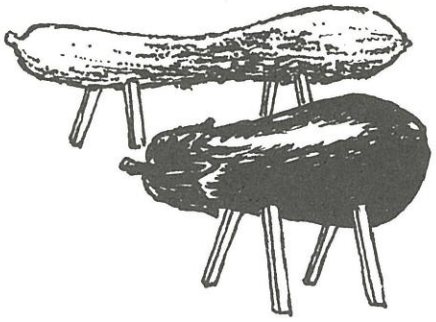
亡母の苦しみを除く作法をお釈迦様は目連尊者にお示しになり、法要が営まれ、亡母はその功徳によって餓鬼の苦しみより救われたというお話が、お盆の行事の始まりだと言われております。

ところで、目連様の母は本当に餓鬼道に堕ちるほど自分勝手な人間だったのでしょうか。何故、子供を可愛がった母親が餓鬼道に堕ちたのでしょうか。人間の愛欲は強いものです。「恩愛の情」といわれる親子の愛情は、何よりも増して強く、時には罪を伴うほど強いものです。他人をおしのけてでも、自分の願いどおりの人間になってほしいという、自分勝手な自己愛、しかし、そうではなく「人間は一人では生きていけない」という教えをお釈迦様は、この「盂蘭盆経」を通してお示しくださったのではないでしょうか。

お盆は、先祖の霊をお迎えして、一家一族の触れ合い、語らいの場であり、自分達を育ててくれた故郷の自然や、先祖に感謝し、静かに今までの人生に思いをめぐらし、反省する大切なひと時ではないでしょうか。

「お盆の準備」

昔は仏壇を利用せず、どの家でも精霊棚を庭先や座敷に作って飾られたようですが、最近は仏壇の前が多いようです。位牌を安置し、精霊棚には、まこものゴザを敷き、その上にナスやキュウリに、オガラで足を付けた牛と馬を作って置きます。これは、ご先祖様が乗ってこられるようにとの心づくしなのです。さらに、ご先祖様が喜ばれるようにと、そーめんなどをお供えします。盆提灯、お灯明、盆花、お香、特に大事な物は水です。水を入れた器を供え、ナスやキュウリを細く刻んで、お洗米とまぜた物を中に入れます。これで精霊に甘露の水をそそぐのです。また、お墓の掃除も心を込めて念入りに。



十三日夜、ご先祖様をお迎えするため玄関前で「迎え火」を、十六日には「送り火」を焚きます。なお、それぞれの地方により風習や習慣もさまざまなようです。

旅 安善寺親睦旅行日記 感激と感動【萩・津和野の旅】

「再度訪れたい萩・津和野」

五月十一日からの小京都萩・津和野の旅行に参加させていただきました。平均年齢六十才と思われる三十五名全員、期待に胸を振るわせ、福岡空港へ。天気は予報通りの大雨。バスで九州道関門大橋を通り、山口県下関市へ。予定していた青海島観光は雨で変更し、東洋一を誇る秋芳洞の大鍾乳洞を観光。その夜は長門湯本温泉で旅の疲れを癒したのでした。

五月十二日、朝から大雨警報。これ以上予定変更できないという事で、前日予定していた青海島を観光。日本海の荒波を受けてできた奇岩はまさに景勝地でありました。

今回旅の目玉、萩の城下町は、雨に降られ通しで、観光客も多く傘のぶつかり合う始末で、記念写真はおろか、ガイドさんの説明も今一つ冴えなかったのが残念です。明治維新の原動力になる人材を育て、歴史に残る町に相応しい遺品・建造物などが保存され、もう一度ゆっくり観光したい所です。

次に島根県津和野へ。森鴎外旧居、石州和紙、殿町通りの掘割を観光。武家屋敷には敷門と土塀が残されており、テレビドラマの撮影場所になるという事です。武家屋敷が町役場に使用され、観光に一役買っての事と思われますが、大変珍しい事です。

その夜は、山口市内の湯田温泉ホテルへ。最後の宴会ということもあり、お互いに気心も知れ、大いに盛り上がった一夜でした。

五月十三日、久しぶりの快晴。皆気分爽快で山口市内の観光。瑠璃光寺の五重の塔は修復作業のため見ることができませんでしたが、全国の五重の塔の模型を陳列の美術館を見られ一様に満足。空港へ向かう途中、関門大橋も見学できました。

私は、昨年の北海道に引き続き今回の旅行が二回目ですが、親睦旅行に相応しく楽しい旅行でした。旅行は感動することが沢山あります。また来年の旅行に振るって参加しましょう。最後に、旅の途中大勢の皆さんにお世話になりましたことを感謝いたします。ありがとうございました。（永井邦男）

「楽しかった安善寺の旅」

旅の安全を本堂で祈り、青空の広がる長岡を出発、新潟空港より空路福岡へ。

安善寺様の旅行は晴れると信じていましたが土砂降りの雨。コースを変更し秋芳洞へ。雨で滔滔と流れる秋芳洞の川に怖さを感じ、奥へ進むうち「極楽浄土」へ来たみたいと呟く人も。神秘的で自然の偉大さに驚きました。

一日目の終わりは長門温泉で旅の疲れを癒しました。

次の日は青海島へ。幸い雨も上がり、奇岩、断崖の続く海岸沿いの遊歩道をゆっくりと歩くことができました。

松陰神社は三代藩主吉就が建立。東光寺は毛利家菩提寺で、奇数代の藩主と婦人を祀っておりました。

土砂降りにすっかりなれ、ズボンを捲り上げ、森鴎外旧居、石州和紙、殿町通りを歩く頃には、靴の中までぐっしょり。ぽつぽつと花菖蒲の咲く掘割の水は濁り、微かに鯉の泳ぐ姿も。

・白壁の　津和野土砂降り
　花菖蒲　　美代子

湯田温泉では、各部屋のてるてる坊主に感激し、温泉で体を温め宴会。倉重様の安来節、方丈様を囲んで十日町音頭を踊り、全員心を通わすことができました。

最終日の瑠璃光寺五重の塔は修復工事で見ることができず残念でした。

常栄寺の広縁に腰を据え、緑豊かな雪舟庭を眺め、修学旅行生に溢れる太宰府天満宮をお参りし、帰路へ。

三日間、素晴らしいガイドさんに恵まれ、病人、怪我人もなく楽しい旅行をさせていただき、方丈様に感謝致しております。（五十嵐ミヨ子）

「思い出深い長州路の旅」

年を重ねること八十年、老骨の我が身。いろんな思いを込め初めて旅行に参加いたしましたが、信仰と観光を兼ね備えた素晴らしい長州路でした。長州といえば元毛利藩。毛利家の菩提寺、東光寺の広大荘厳な境内と歴代藩主の重厚な墓碑。萩の城下町、津和野の家老元屋敷、山口の国宝五重の塔など、連日、名ガイド嬢の案内で拝観でき、歴史の流れと重みをしみじみ肌で感じ、感無量でした。

若い時からの念願、松陰神社、松下村塾、太宰府天満宮に敬虔な祈りを捧げるとともに、お二方の悲運の生涯と辞世の詩歌に思いを致し、その魂にふれることの出来たことは、生涯の喜びであり、大きな感動を受けました。

私は支那事変出動後の昭和十五年傷痍軍人白衣の身となり、小倉陸軍病院入院約一ヶ月、無念涙の日を送ったことがありましたが、それから五十八年経った今回の旅行中、たまたま九州の見える関門海峡壇ノ浦の岬に立って往事を偲び、頬に涙の回想に浸ることの出来たこと、帰りの機上八千米の上空雲海に沈む太陽と雲の荘厳な美しい光景、日本海の夕日、落日の美しさなど、総てが感激と感動の旅であり、思い出は尽きません。

顧みて、今回の旅行に当たり、方丈様、寺役の方々、その他関係者の温かいお世話のお陰で格別思い出に残る旅行ができたことを心より感謝致しております。いつの日にか、またの再会を楽しみに…。

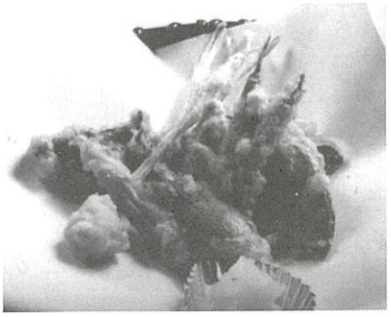
（倉重　清）

旬（しゅん）を大切に、お盆料理

近藤マリ子

安善寺の玄関を入りますと、先代住職の筆跡で「脚下照顧」と書かれてあるのをご覧になられた方も多くいらっしゃると思います。どんな社会にも共通して言える言葉だと思いますが、古くからの基本を大切にしないで新しいものばかりを追っていると、やがては脚許をすくわれてしまう。精進料理なんて申しますと、何となく大げさに感じられがちですが、基本を素材の良さ、旬の持ち味を大切にして作られるものだと思います。

当初、単品の紹介位に考えておりましたが、編集長さんから「今回はお盆の精進料理を」とのご注文。時期的に少し早く、材料自体手に入らないものもありましたので、考えておりました料理より少し変わってしまいました。一年中で、人の出入りの多いこの時期に、誰にでも出来て、簡単に手に入る旬の素材だけで作ってみました。



『精進揚げ』

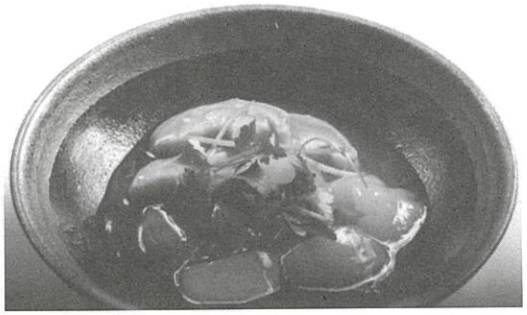
嬉しいくらい揚げものに適した野菜の多い時期です。採れたての野菜を型にこだわらず、何でも揚げてみるとよいと思います。あれもこれもと思っておりますとつい揚げすぎてしまいますので、今回はかぼちゃ、茄子、印元、新生姜、茗荷を揚げてみました。

衣は氷水に小麦粉を少し濃いめにとき、材料に衣をなるべく少なくつけます。油の温度は、衣を少し油の中に落とし、ジューといって油の中間まで一度沈んだものが、すぐに浮き上がるくらいが良いと思います。

『冬瓜と車麩の煮もの』

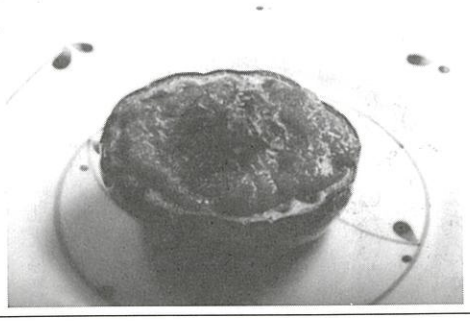
冬瓜四分の一個、車麩小三個、昆布だし汁三カップ、醤油大さじ一、味醂大さじ一、葛大さじ一、三ツ葉少々。

冬瓜は皮を厚くむき、種と綿を取り除いてから四センチ位の角切りにして面取りをしてから、さっとひとゆでしておく。車麩は、芯の部分が柔らかくなる位まで水で浸し、両手で押さえながら良く絞る。両方の材料をだし汁、醤油、味醂をあわせた中で、冬瓜が柔らかくなるまで煮る。柔らかくなったら同量の水で溶いた葛を徐々に加えて、全体が透き通ってとろ味が出るまでかき混ぜ火を止める。平鉢に盛りつけ、つゆをはり三ツ葉をあしらう。



『長岡茄子の田楽』

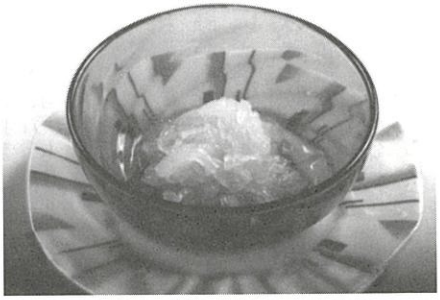
長岡茄子は、上下を切り落とし、横に半分に切り、水にさらしてあく抜きをします。布巾で水気をふき取りフライパンにサラダ油を熱し、両面に焦げ目がつき、箸が通るくらいになったらお皿に盛り、味噌、砂糖、酒で作っておいた甘味噌を載せ、その上に青じその刻んだものを載せて、熱いうちに頂くのが美味です。味噌の代わりに大根おろしで頂いてもさっぱりして美味しいものです。



『糸瓜の三杯酢』

糸瓜五百グラム、酢大さじ四、砂糖大さじ二、塩小さじ一、だし汁大一。

糸瓜は皮をむいて輪切りにし、種をとって、たっぷりの湯で箸が通るくらいまで茹でる。茹で上がったら冷水にとり、ほぐして良く絞り、三杯酢で和えて冷やしておくと美味しく頂けます。



お別れ

（平成十年三月～六月末）

石田テルノ様　三月四日寂
長岡市昭和

石黒トサ様　四月六日寂
長岡市今朝白

築取梅野様　四月廿九日寂
長岡市水道町

斉藤セツ様　五月廿日寂
長岡市福住

須佐越朗様　五月廿二日寂
長岡市稽古町

中山清作様　五月廿六日寂
竜ヶ崎市小柴

中野のぶ様　六月十五日寂
川崎市麻生区

ご冥福をお祈り申し上げます。

【大般若法要】

結城ふみ

毎年、六月十二日には大般若法要が行われます。私は、いつもお参りをさせていただいておりますが、三十人あまりのお坊さんが大般若六百巻のお経を転読されます。本当にありがたく、身の引き締まる思いです。亡き母もお寺参りを何よりの楽しみにしており、「大般若の風にあたると、いつまでも健康でいられる」と申しておりましたが、私も元気でいられるのも仏様のおかげかと、手を合わせております。

今年は、写経会の方もお誘いし、数人の方々がお参りに来られ、喜んでおられました。法話は海津老師様で、いつお聞きしてもありがたいお話しでいいですね。私も、母同様、お寺参りが大好きです。ありがたい法要に一人でも多くお参りくださることを願っております。

無碍智俳句の会へ 遊びに来てください

目黒英美

方丈様の「お寺を広く開放する」との理念と「俳句を愉しみたい」との思いから、俳句会が持たれることになったのが、平成二年秋。初めたころは名称も「安善寺俳句会」。方丈様ご夫妻を含め、六名の小さな俳句会でした。

平成四年四月、方丈様が「無碍智俳句の会」と名付けてくださいました。「無碍智」とは「なんのとらわれもない、大いなる願いからくる深い知恵の世界。仏の智恵」の意とのこと。この時会員は十名。「新しい革袋には、新しい酒を」と、気持ちを新たにしたことはいうまでもありません。

俳句は難しいものではありません。私の師は「平明に写生すること。日記風であって良い」といわれております。季節のことを五・七・五の文字にまとめ、その日その日の目にとめたこと、心に感じたことを詠みあげればそれで「良し」です。季語、季重、切れ字（や…かな）などの制約はやって行くうちに追々分かってきます。

俳句はハイク。ハイキングをするつもりで、皆さん無碍智俳句の会に遊びに来てください。会員の句をご紹介します。

・去年今年　天下宇宙に　変わりなし　近藤　悠萌
・受験子の　欠けし茶碗を　買ひ代へて　近藤マリ子
・懺悔の嘘　方便の嘘　仏去る　会田ひとし
・谷川を　渡して昇る　鯉幟　阿部　冬子
・擦れ違ふ　娘の香水の　あまきかな　五十嵐美代子
・秋澄むや　二人の旅は　寺巡り　小林　竹子
・秋袷　母のにほひの　なつかしく　鷲見　豊子
・水引の　花ほつほつと　空に伸び　太刀川八百子
・筍を　さげて定年　告げに来る　天海　紀子
・雛段に　怪獣もあり　賑々し　室賀　静英
・アパートの　窓いっぱいに　鯉幟　山崎　恵
・堂縁に　夏鶯の　ひとしきり　目黒　英美

五の自ら滅ぶ心

小林国二

壮年期に自らが達した時高慢さ、焦り、それなりの満足度と心揺れる時期になって来る。心の乱れは精神の乱れ、最後には体の乱れとなる。思考低下、錯乱状態と何をしても面白くない…。ほとんど病気と考えるか、自己分析のなかで光明を見いだすか。そんな時、反省すべき呪文を唱える。五の自ら滅ぶ心となっていないか。①貪（むさぼ）りの心～普通以上に欲しがっていないか。②怒（いかり）りの心～おこっていないか。③愚（おろ）かな心～知恵が少ないか。④自惚（うぬぼ）れの心～実際以上に自分が優れていると思っていないか。⑤疑（うたぐ）りの心～怪しんだり、訝（いぶか）っていないか。自らを戒め、反省せねばならない。安善寺檀家各位のお世話を微力ながらさせて戴き、経文に接しながら常に平常心でありたいと願うところです。

謙虚と寛容と感謝そして奉仕が信条です。　匁々

「思い出」

小林善秋

「あったてんがない」なんと懐かしい、温かみのある言葉だろう。この原稿を依頼され、何を書こうか悩んでいた時、新聞を開いていたらふと目に止まった言葉で、ご承知のように昔話にはなくてはならない大切な一言で、最初の言葉である。

私も幼い頃、毎日のように祖母から昔話を聞かせてもらい、また眠そうな祖母にその次、その次はと話をせがみ、大きなあくびをしながら昔話をしてくれた祖母。それを聞きながら眠りについたことを懐かしく思い出されます。その祖母も亡くなってもう三十三年が過ぎ、最近あまり思い出すことがなかったのが、原稿を依頼されたことにより、忘れかけていた事を思い出すことができ、何か温かい、ほんのりとした気持ちになったことを感謝いたします。

編集雑感

創刊号が皆様に届いたのがまだ東山に雪が残っている頃でした。いつのまにか田んぼの稲は青々として初夏を迎えています。

「蔵王山・安善寺」も第二号の発刊となりました。創刊号では自己紹介的な紙面になっておりますが、編集スタッフとしてはこの紙面が単なるお寺からの情報伝達の場ではなく、お檀家の皆様が交流の場として、もっともっと安善寺や仏教を身近なものとして感じて頂けるための触媒をコンセプトとして取り組んでおります。

第二号では、結婚式は神前やチャペルだけではありませんよということで、仏前結婚式を紹介させていただきました。佐藤さん、奥様にお願いしたお盆特集もいかがだったでしょう。少し利口になったような気がしませんか。

大変な不景気ですが、こんな時こそ心静かに手を合わせ豊かな心を失わないようにしたいものです。

（高橋　潔）

第3号、秋の号は九月十四日(月)発刊予定です。